Kwansei Gakuin University Repository

KGUR 関西学院大学リポジトリ
KWANSEI GAKUIN UNIVERSITY REPOSITORY

Title	過去20年間における保育系学生の情動特性の変化
Author(s)	Saiki, Hisayo, 斉木, 久代
Citation	聖和論集, 42: 13-22
Issue Date	2014-12-20
URL	http://hdl.handle.net/10236/13126
Right	

http://kgur.kawansei.ac.jp/dspace

過去20年間における保育系学生の情動特性の変化

The Emotional Traits of Junior College Students of Early Childhood Education in the Last Twenty Years

齊　木　久　代*

Ⅰ　はじめに

保育者の職務においては、対人援助が、その重要な要件となってくることから、個々の保育者の専門的知識、技術に加えて、そのパーソナリティ特性、特に、その情動特性が保育者としての適性に深く関わってくると思われる。従って、保育者養成校においては、学生の学力向上のみではなく、その特性的側面にも配慮が必要であると思われる（齊木, 2013）。

Plutchik（1962, 1980）は、情動を「進化論的適応をその基盤とするコミュニケーションと生存のためのメカニズムである」と仮定し、情動の心理進化論を展開した。そして、この適応行動の基本類型として８つの機能を有する行動原型を考え、これに対応する基本情動を仮説構成概念として設定し、それらを主観的、行動的、機能的側面などから説明している。

また、Plutchik & Kellerman（1974）は、情動の特性的側面に注目して、その個人差を測定する検査、Emotions Profile Index（以下 EPI と略す）（Plutchik & Kellerman, 1972; Hama & Plutchik, 1975）を作成した。この検査では、12個の特性語を一対比較して、対提示された特性語のうち普段の自分をよく表していると思う方の語を選ぶことを求められる。結果の処理段階では、各特性語の基礎となる情動の構成要素に対して得点化がなされる。評価の対象となる特性語と主な構成要素とされる情動は次のとおりである：冒険ずき（驚き、期待）、心やさしい（受容、喜び）、むっつりと（怒り、悲しみ）、用心ぶかい（期待、恐れ）、ゆううつな（悲しみ、怒り）、考えなしに（驚き、怒り）、すなおな（受容、恐れ）、けんかずき（怒り、嫌悪）、おこりっぽい（怒り、嫌悪）、自分を意識する（期待、嫌悪）、内気な（恐れ、期待）、社交的（受容、喜び）（松山・浜, 1974；三根（齊木）, 1993）。

三根（齊木）（1998）では、1993年度、1994年度のＳ大学教育学部幼児教育学科１年生175名、Ｓ大学短期大学部保育科1年生361名、同英語科135名の女子学生について、EPI を施行して、各尺度得点の学科間の差異を検討した。EPI で測定されるとされる情動特性ならびに関連する情動とその機能は、信じやすさ（「受容」: 合一）、臆病さ（「恐れ」: 保護）、抑うつ（「悲しみ」: 再統合）、疑り深さ（「嫌悪」: 拒絶）、攻撃性（「怒り」: 破壊）、群居性（「喜び」: 生殖）、抑制（「期待」: 探索）、抑制不足（「驚き」: 定位づけ）である（ただし、本稿では情動特性を表すのに便宜的に関連する基本情動名を用いている）。

この調査結果では、「受容」、「喜び」、「驚き」、「バイアス」尺度得点において、学科の有意な主効果が得られた。「受容」では、保育科、幼児教育学科、英語科の順に得点が高く、学科間にいずれも有意差があった。「喜び」では、保育科が英語科より有意に高かった。「驚き」、「バイアス」では、保育科が他学科より有意に高かった。なお、EPI における「バイアス」尺度得点は、社会的に望ましい語を選ぶ傾向を反映するとされている。

さらに、三根（齊木）（1999）では、同保育科の1993年度より1998年度までの入学者866名に実施された EPI 得点について、1996年度より公募推薦入試において導入された面接の点数化が与えた影響について検討した。この中で、導入前の93、94年度と導入後97、98年度の得点を、面接の点数化を行っていない一般入試入学者と点数化を行った公募推薦入学者で比較したところ、「喜び」、「受容」、および「バイアス」尺度得点で点数化導入前には“入試区分”（一般入試、公募推薦入試）で差がみられなかったのに対して、導入後には、公募推薦入学者の得点が、一般入試の者に比して、有意に高く、面接の点数化

* Hisayo SAIKI　聖和短期大学保育科教授、教育心理学、臨床心理学

が入学者の情動特性に影響を有した。また、EPIの「受容」尺度はPlutchik（1980）によれば、「グループの成員の世話をする」という行動原型に関連した基本情動と考えられており、公募推薦入学者において得点の有意な上昇が認められたことは、適切な「保育者としての適性評価」が行われていることを示唆するものと考えられた。

一方で、「驚き」、「期待」において有意な主効果があり、1993-94年度に比して、1997-98年度では、「驚き」得点が減少し、「期待」得点が増しており、行動抑制傾向が強くなっている。1995年１月、調査校の立地する阪神地域は、阪神淡路大震災に見舞われており、このことがこの変化の一因となっている可能性も考えられた。

また、「生きる力」を育むための「ゆとり教育」政策による新学習指導要領が小・中学校版で1998年12月、高校版で1999年３月に告示、それぞれ、2002年４月と2003年４月に実施された。2002年４月からは学校週５日制の完全実施が始まった。本調査対象者では、2006年度入学者が高校入学時より、2009年度入学者が中学入学時より、この「ゆとり教育」を受けてきた学年ということになる。

この「ゆとり教育」が、その教育を受けた世代の生徒（学生）に何をもたらしたかについては、「学力低下論争」をはじめ様々な議論がなされている（市川，2002；苅谷，2002）。また、齋藤（2013）[1)]は20年以上にわたる教職経験から、「ゆとり世代」と呼ばれる最近の学生の特徴について、「おとなしい」「真面目」「何を考えているかわからない」と特徴づけている。

本報告では、同一養成校で1993年度より2013年度までの21年間における入学者の情動的な特性について、EPIを用いて調査を行ってきた結果を集計、分析し、検討したいと考える。

Ⅱ　方　法

調査対象者

兵庫県内私立Ｓ短期大学保育科に1993年４月から2013年４月までに入学した女子3,306名。

手続き

心理学関連科目の講義の際に各年次の学生にEPIを配布し、集団法にて実施した。表１は、各入学年度毎に、実施学年、実施月日、調査対象数をまとめたものである。

表１　入学年度別調査対象数、実施時期

誕生年度	入学年度	実施学年**	実施月日	対象数
1974年	1993年	１年次	７月２日	175
1975年	1994年	１年次	７月６日	186
1976年	1995年	１年次	６月27日	171
1977年	1996年	１年次	６月26日	169
1978年	1997年	１年次	７月２日	163
1979年	1998年	１年次	７月14日	155
1980年	1999年	１年次	７月12日	161
1981年	2000年	１年次	６月19日	139
1982年	2001年	１年次	７月２日	138
1983年	2002年	２年次	４月30日	176
1984年	2003年	２年次	６月３日	182
1985年	2004年	２年次	５月26日	173
1986年	2005年	２年次	５月25日	167
1987年	2006年	２年次	５月23日	126
1988年	2007年	２年次	６月５日	131
1989年	2008年	２年次	６月１日	153
1990年	2009年	２年次	６月２日	146
1991年	2010年	２年次	６月７日	129
1992年	2011年	１年次	11月21日	156
1993年	2012年	１年次	11月28日	154
1994年	2013年	１年次	12月５日	156

**実施学年の影響については、2001-2年度、2010-11年度入学者について、分散分析（学年、年度）を行ったところ「学年」の有意な主効果があったのは「怒り」のみで、２年次に実施した方がより低い値を示した。また、「受容」においてのみ2001-2年で２年次がより高い得点を示したが、2010-11年では差がみられないという「年度」との有意な交互作用が見られた。

Ⅲ　結果と考察

１　各情動得点とバイアス得点の年次変化

対象となる21年間を次の３年ごとの７期間（“期間”）にまとめて集計した。期間１：1993～1995年度、期間２：1996～1998年度、期間３：1999～2001年度、期間４：2002～2004年度、期間５：2005～2007年度、期間６：2008～2010年度、期間７：2011～2013年度。表２は、この結果をまとめたものである。図1-1～9は、８個の基本情動尺度得点とバイアス得点における期間の経過による変化を図示したものである。

“期間”による効果について、分散分析を用いて検定したところ、「受容」、「悲しみ」、「嫌悪」、「驚き」尺度得点において、“期間”の有意な主効果が見られ、「恐れ」、「喜び」尺度得点で有意な効果への傾向がみられた（表３）。“期間”の有意な主効果および有意な傾向がみられた尺度得点について、期間ごとの平均尺度得点のLSD検定による多重比較をお

1）齋藤孝　2013　若者の取扱説明書：「ゆとり世代」は、実は伸びる　PHP新書、p.13

表２　期間、年代別の情動、バイアス尺度得点の平均値、標準偏差 *SD*、*Z* 得点

	入学年度	期間	対象数	平均値	*SD*	年代	対象数	平均値	*SD*	*Z* 得点
受容	1993-1995	1	532	18.99	5.33	Ⅰ	532	18.99	5.33	50.89
	1996-1998	2	487	18.18	5.50					
	1999-2001	3	438	18.46	5.09	Ⅱ	925	18.31	5.31	49.63
	2002-2004	4	531	18.72	5.08					
	2005-2007	5	424	18.72	5.19	Ⅲ	955	18.72	5.13	50.39
	2008-2010	6	428	17.92	5.63					
	2011-2013	7	466	18.44	5.70	Ⅳ	894	18.19	5.66	49.41
	合計		3306	18.51	5.37					

	入学年度	期間	対象数	平均値	*SD*	年代	対象数	平均値	*SD*	*Z* 得点
恐れ	1993-1995	1	532	15.27	5.07	Ⅰ	532	15.27	5.07	50.25
	1996-1998	2	487	15.32	4.95					
	1999-2001	3	438	15.18	5.16	Ⅱ	925	15.26	5.05	50.23
	2002-2004	4	531	14.71	4.94					
	2005-2007	5	424	14.71	5.29	Ⅲ	955	14.71	5.09	49.15
	2008-2010	6	428	15.39	5.04					
	2011-2013	7	466	15.43	5.15	Ⅳ	894	15.41	5.10	50.54
	合計		3306	15.14	5.08					

	入学年度	期間	対象数	平均値	*SD*	年代	対象数	平均値	*SD*	*Z* 得点
期待	1993-1995	1	532	19.23	4.60	Ⅰ	532	19.23	4.60	49.75
	1996-1998	2	487	19.74	4.69					
	1999-2001	3	438	19.59	4.57	Ⅱ	925	19.67	4.63	50.70
	2002-2004	4	531	19.28	4.38					
	2005-2007	5	424	18.91	4.55	Ⅲ	955	19.11	4.46	49.49
	2008-2010	6	428	19.53	4.68					
	2011-2013	7	466	19.17	4.94	Ⅳ	894	19.34	4.82	49.98
	合計		3306	19.35	4.63					

	入学年度	期間	対象数	平均値	*SD*	年代	対象数	平均値	*SD*	*Z* 得点
悲しみ	1993-1995	1	532	7.34	4.19	Ⅰ	532	7.34	4.19	48.66
	1996-1998	2	487	7.70	4.12					
	1999-2001	3	438	8.05	4.05	Ⅱ	925	7.87	4.09	49.94
	2002-2004	4	531	7.82	3.96					
	2005-2007	5	424	7.96	4.07	Ⅲ	955	7.88	4.01	49.98
	2008-2010	6	428	8.00	3.98					
	2011-2013	7	466	8.45	3.99	Ⅳ	894	8.23	3.99	50.84
	合計		3306	7.89	4.06					

	入学年度	期間	対象数	平均値	*SD*	年代	対象数	平均値	*SD*	*Z* 得点
嫌悪	1993-1995	1	532	9.72	4.56	Ⅰ	532	9.72	4.56	49.96
	1996-1998	2	487	10.22	4.55					
	1999-2001	3	438	10.03	4.68	Ⅱ	925	10.13	4.61	50.85
	2002-2004	4	531	9.96	4.67					
	2005-2007	5	424	9.64	4.68	Ⅲ	955	9.82	4.67	50.17
	2008-2010	6	428	9.52	4.63					
	2011-2013	7	466	9.07	4.05	Ⅳ	894	9.28	4.34	49.00
	合計		3306	9.74	4.56		3306	9.74	4.56	

	入学年度	期間	対象数	平均値	*SD*	年代	対象数	平均値	*SD*	*Z* 得点
怒り	1993-1995	1	532	8.61	5.54	Ⅰ	532	8.61	5.54	49.64
	1996-1998	2	487	8.83	5.60					
	1999-2001	3	438	8.59	5.29	Ⅱ	925	8.71	5.45	49.84
	2002-2004	4	531	8.73	5.38					
	2005-2007	5	424	9.10	5.24	Ⅲ	955	8.90	5.32	50.18
	2008-2010	6	428	8.90	5.37					
	2011-2013	7	466	8.93	5.05	Ⅳ	894	8.91	5.20	50.21
	合計		3306	8.80	5.36					

	入学年度	期間	対象数	平均値	*SD*	年代	対象数	平均値	*SD*	*Z* 得点
驚き	1993-1995	1	532	10.88	4.34	Ⅰ	532	10.88	4.34	51.01
	1996-1998	2	487	10.39	4.50					
	1999-2001	3	438	9.91	4.56	Ⅱ	925	10.16	4.54	49.39
	2002-2004	4	531	10.40	4.42					
	2005-2007	5	424	10.51	4.46	Ⅲ	955	10.45	4.44	50.05
	2008-2010	6	428	10.62	4.30					
	2011-2013	7	466	10.24	4.22	Ⅳ	894	10.42	4.26	49.98
	合計		3306	10.43	4.41					

	入学年度	期間	対象数	平均値	*SD*	年代	対象数	平均値	*SD*	*Z* 得点
喜び	1993-1995	1	532	13.61	4.30	Ⅰ	532	13.61	4.30	50.21
	1996-1998	2	487	13.20	4.32					
	1999-2001	3	438	13.59	4.19	Ⅱ	925	13.38	4.26	49.68
	2002-2004	4	531	13.92	4.03					
	2005-2007	5	424	13.67	4.34	Ⅲ	955	13.81	4.17	50.68
	2008-2010	6	428	13.11	4.57					
	2011-2013	7	466	13.48	4.40	Ⅳ	894	13.30	4.49	49.50
	合計		3306	13.52	4.31					

	入学年度	期間	対象数	平均値	*SD*	年代	対象数	平均値	*SD*	*Z* 得点
バイアス	1993-1995	1	532	34.28	6.77	Ⅰ	532	34.28	6.77	51.02
	1996-1998	2	487	33.44	6.74					
	1999-2001	3	438	33.74	6.85	Ⅱ	925	33.58	6.79	49.99
	2002-2004	4	531	33.69	6.53					
	2005-2007	5	424	33.44	6.70	Ⅲ	955	33.58	6.60	49.98
	2008-2010	6	428	33.30	7.10					
	2011-2013	7	466	33.14	6.50	Ⅳ	894	33.21	6.79	49.44
	合計		3306	33.59	6.74					

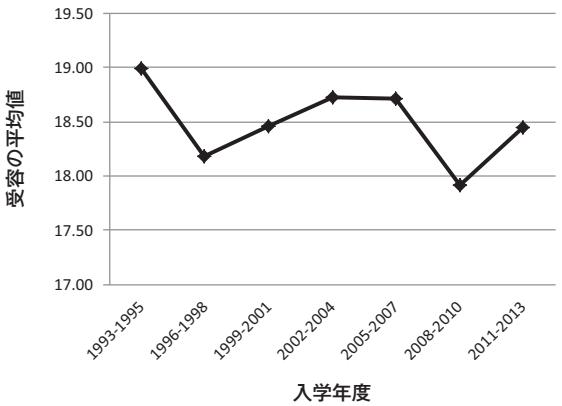

図1-1　入学年度による受容得点の変化

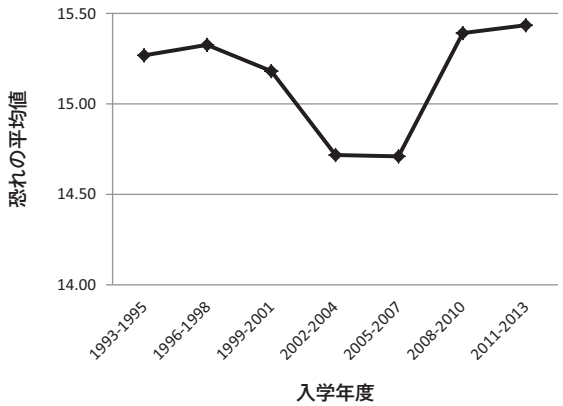

図1-2　入学年度による恐れ得点の変化

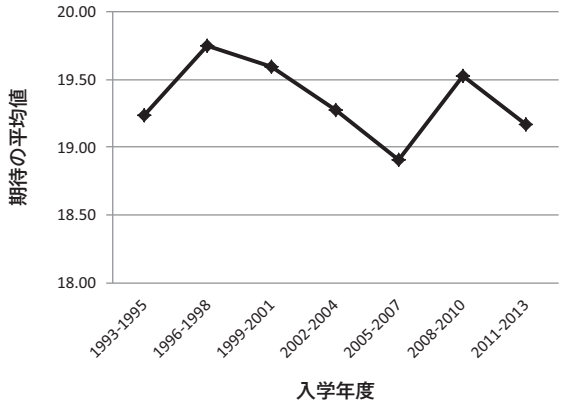

図1-3　入学年度による期待得点の変化

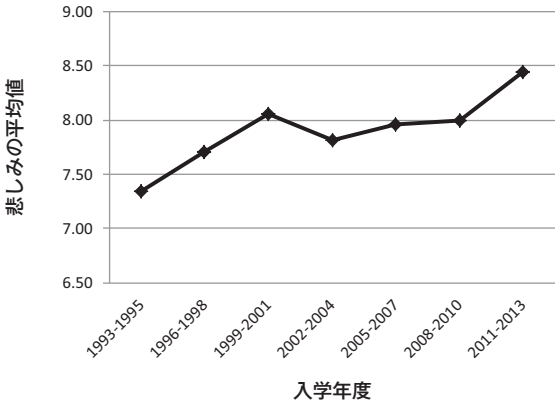

図1-4　入学年度による悲しみ得点の変化

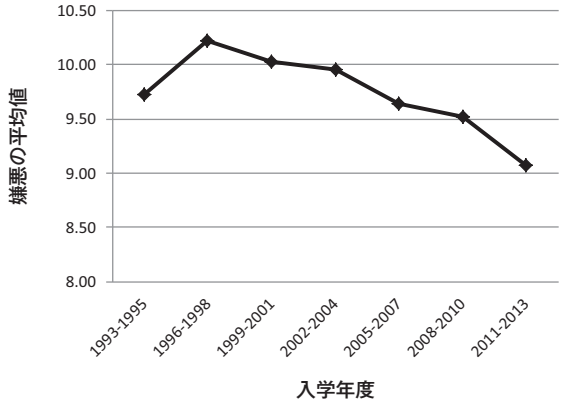

図1-5　入学年度による嫌悪得点の変化

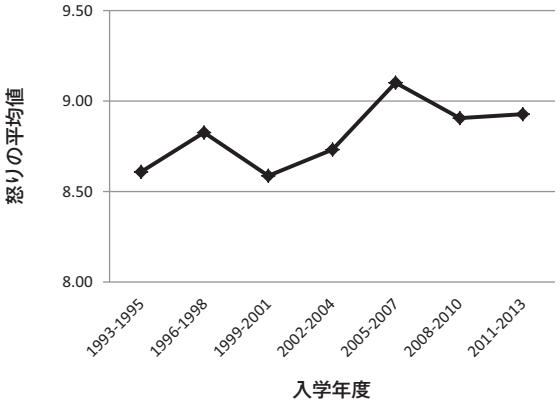

図1-6　入学年度による怒り得点の変化

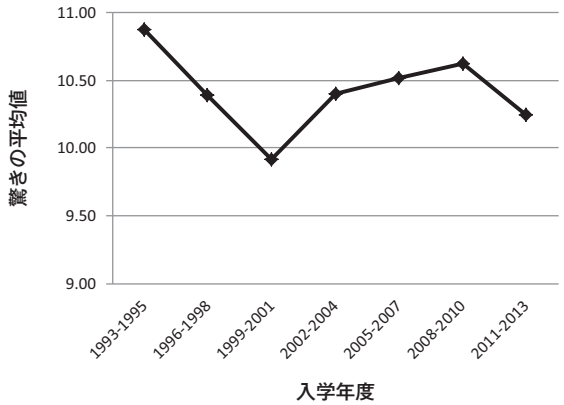

図1-7　入学年度による驚き得点の変化

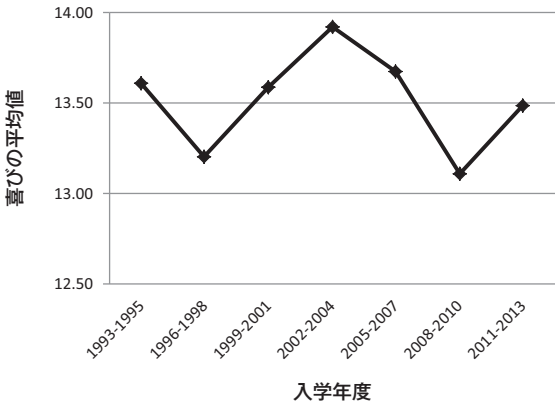

図1-8　入学年度による喜び得点の変化

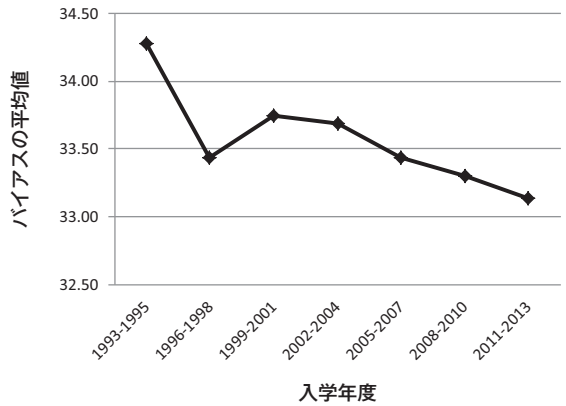

図1-9　入学年度によるバイアス得点の変化

表3　各尺度得点の期間についての分散分析

		平方和	自由度	平均平方	F値	p
受容*	級間	371.68	6	61.95	2.16	.044
	級内	94806.67	3299	28.74		
	合計	95178.35	3305			
恐れ	級間	269.39	6	44.90	1.74	.108
	級内	85115.22	3299	25.80		
	合計	85384.61	3305			
期待	級間	221.78	6	36.96	1.72	.111
	級内	70706.90	3299	21.43		
	合計	70928.68	3305			
悲しみ**	級間	341.48	6	56.91	3.46	.002
	級内	54268.08	3299	16.45		
	合計	54609.55	3305			
嫌悪**	級間	409.57	6	68.26	3.30	.003
	級内	68277.94	3299	20.70		
	合計	68687.51	3305			
怒り	級間	92.63	6	15.44	.54	.780
	級内	94831.57	3299	28.75		
	合計	94924.20	3305			
驚き*	級間	260.63	6	43.44	2.24	.037
	級内	63916.00	3299	19.37		
	合計	64176.64	3305			
喜び+	級間	226.30	6	37.72	2.04	.058
	級内	61096.59	3299	18.52		
	合計	61322.89	3305			
バイアス	級間	419.31	6	69.88	1.54	.161
	級内	149612.12	3299	45.35		
	合計	150031.43	3305			

＊＊p<.01　＊p<.05　+p<.10

こなった。表4は、この結果をまとめたものである。

「受容」では、1993～1995年度に比して、1996～2001年度と2008～2010年度の期間で有意な減少がみられ、さらに、2008～2010年度においては、2002～2004年度、2005～2007年度に比しても、有意な減少が認められた。

「悲しみ」では、1993～1995年度に比して、1999年度以降のすべての期間で有意な増加が認められた。さらに、2011～2013年度では、1996～1998年度、2002～2004年度と比しても、有意な増加がみられた。

「嫌悪」では、1993年度から2004年度までの期間に比して、2011～2013年度の期間で有意な減少がみられ、2008～2010年度の期間でも、1996～1998年度に比して、有意な減少が認められた。

「驚き」では、1999～2001年度の期間で、一旦有意な減少が見られるが、再度、増加がみられたが、2011年度以降有意な減少が生じている。

「喜び」では、1996～1998年度から2002～2004年度にかけて有意な増加がみられたが、2008～2010年度にかけて有意な減少が認められている。

2　各情動得点とバイアス得点の年代による変化

さらに、“期間”間の有意差を考慮し、互いに有意な差が認められなかった期間をまとめて次の4つ

表4　期間ごとの平均値間多重比較

	期間	1	2	3	4	5	6	7
受容	1	—	*				**	
	2	*	—					
	3			—				
	4				—		*	
	5					—	*	
	6	**			*	*	—	
	7							—
悲しみ	1	—		**		*	*	**
	2		—					**
	3	**		—				
	4				—			*
	5	*				—		
	6	*					—	
	7	**	**		*			—
嫌悪	1	—						*
	2		—				*	**
	3			—				**
	4				—			**
	5					—		
	6		*				—	
	7	*	**	**	**			—
驚き	1	—		**				*
	2		—					
	3	**		—		*	*	
	4				—			
	5			*		—		
	6			*			—	
	7	*						—
喜び	1	—						
	2		—		**			
	3			—				
	4		**		—		**	
	5					—		
	6				**		—	
	7							—

＊＊p<.01　＊p<.05

期間1：1993-1995年度、期間2：1996-1998年度
期間3：1999-2001年度、期間4：2002-2004年度
期間5：2005-2007年度、期間6：2008-2010年度
期間7：2011-2013年度

の年代に集計した（表２）。年代Ⅰ：1993～1995年、年代Ⅱ：1996～2001年、年代Ⅲ：2002～2007年、年代Ⅳ：2008～2013年。図2-1～9は、８個の基本情動尺度得点とバイアス得点における期間の経過による変化を図示したものである。

“年代”による効果について、分散分析を用いて検定したところ、「受容」、「恐れ」、「悲しみ」、「嫌悪」、「驚き」、および「バイアス」尺度得点において、“年代”の有意な主効果が見られ、「期待」、「喜び」尺度得点で有意な効果への傾向がみられた（表５）。“年代”の有意な主効果および有意な傾向がみられた尺度得点について、年代ごとの平均尺度得点のLSD 検定による多重比較をおこなった。表６は、この結果をまとめたものである。

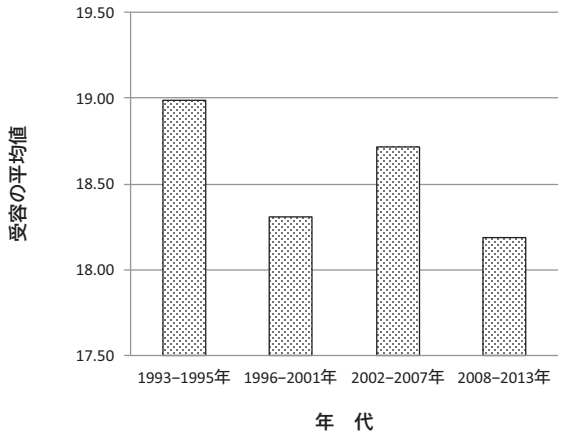

図2-1　年代ごとの受容得点

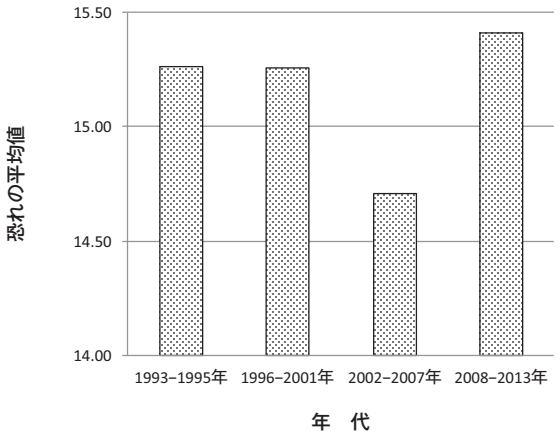

図2-2　年代ごとの恐れ得点

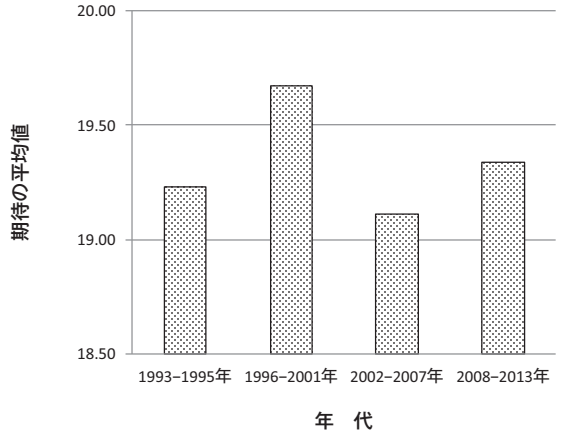

図2-3　年代ごとの期待得点

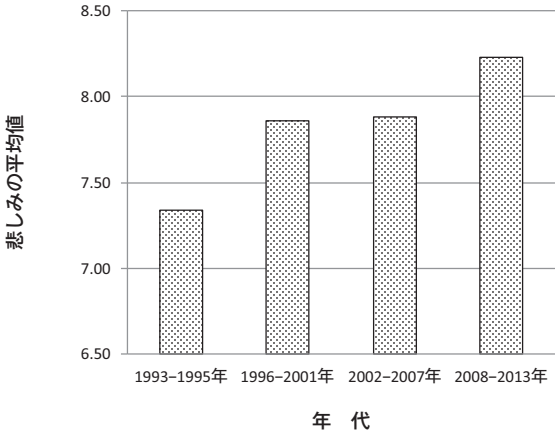

図2-4　年代ごとの悲しみ得点

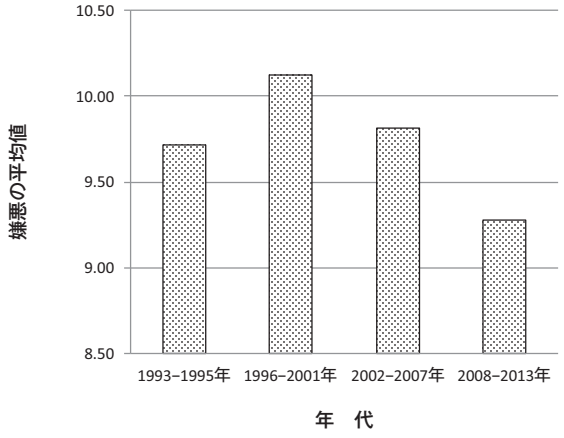

図2-5　年代ごとの嫌悪得点

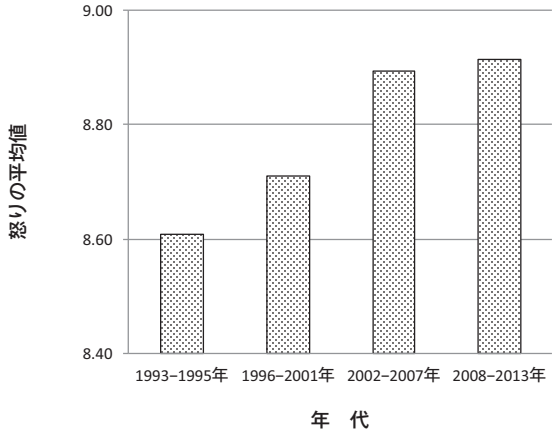

図2-6　年代ごとの怒り得点

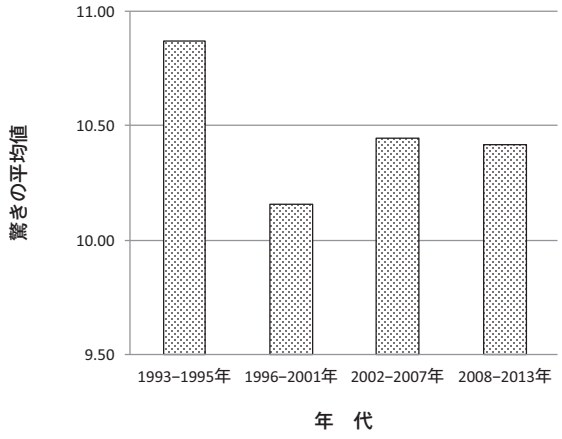

図2–7　年代ごとの驚き得点

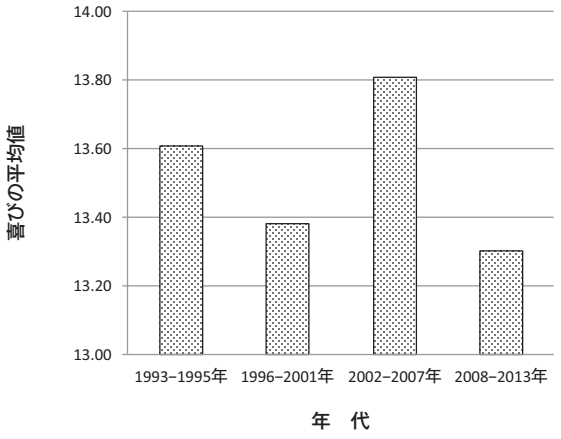

図2–8　年代ごとの喜び得点

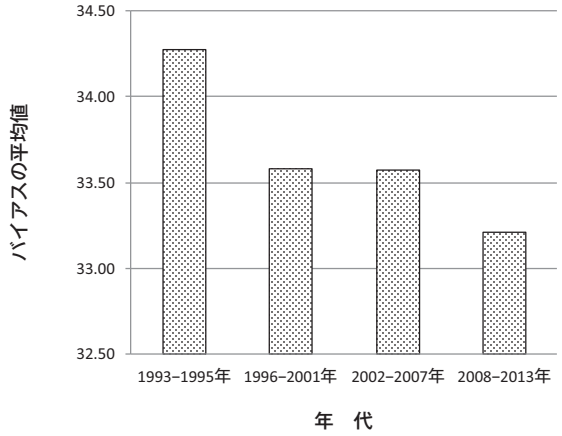

図2–9　年代ごとのバイアス得点

表５　各情動尺度の年代についての分散分析

		平方和	自由度	平均平方	*F* 値	*p*
受容*	級間	290.696	3	96.899	3.372	.018
	級内	94887.657	3302	28.736		
	合計	95178.354	3305			
恐れ*	級間	264.401	3	88.134	3.419	.017
	級内	85120.211	3302	25.778		
	合計	85384.612	3305			
期待+	級間	156.654	3	52.218	2.436	.063
	級内	70772.030	3302	21.433		
	合計	70928.684	3305			
悲しみ**	級間	262.726	3	87.575	5.321	.001
	級内	54346.825	3302	16.459		
	合計	54609.551	3305			
嫌悪**	級間	330.337	3	110.112	5.319	.001
	級内	68357.173	3302	20.702		
	合計	68687.510	3305			
怒り	級間	46.950	3	15.650	.545	.652
	級内	94877.252	3302	28.733		
	合計	94924.202	3305			
驚き*	級間	173.166	3	57.722	2.978	.030
	級内	64003.471	3302	19.383		
	合計	64176.638	3305			
喜び+	級間	144.750	3	48.250	2.604	.050
	級内	61178.138	3302	18.528		
	合計	61322.888	3305			
バイアス*	級間	377.971	3	125.990	2.780	.040
	級内	149653.461	3302	45.322		
	合計	150031.432	3305			

＊＊$p<.01$　＊$p<.05$　+$p<.10$

「受容」では、1993～1995年に比して、1996～2001年と2008～2013年で有意な減少がみられ、さらに、2008～2013年においては、2002～2007年に比しても、有意な減少が認められた。「悲しみ」では、1993～1995年に比して、1999年以降のすべての期間で有意な増加が認められた。さらに、2011～2013年では、1996～1998年、2002～2004年と比しても、有意な増加がみられた。「恐れ」では、2002～2007年で一旦有意な減少が認められたが、2008年以降有意な増加が見られる。「期待」では、1996～2001年から、2002～2007年にかけて有意な減少があった。「悲しみ」では、1993～1995年に比して、それ以降の年代では有意な増加が認められた。「嫌悪」では、1996～2001年、2002～2007年に比して、2008～2013年で有意な減少が認められた。「驚き」では、1993～1995年に比して1996～2001年で有意な減少が見られた。「喜び」は、2002～2007年で、その前後の年代に比して有意に高い。

3　年代による情動プロフィールの変化

８個の情動特性のプロフィールを得るために、全期間における情動尺度得点の平均値と標準偏差から、年代ごとの標準得点（Z 得点）を求めた（表２参照）。

図3-1～4は、この標準得点によって年代ごとの情

表6　年代ごとの平均値間多重比較

	年代	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ
受容	Ⅰ	―	*		**
	Ⅱ	*	―		
	Ⅲ			―	*
	Ⅳ	**		*	―

	年代	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ
恐れ	Ⅰ	―		*	
	Ⅱ		―	*	
	Ⅲ	*	*	―	**
	Ⅳ			**	―

	年代	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ
期待	Ⅰ	―			
	Ⅱ		―	**	
	Ⅲ		**	―	
	Ⅳ				―

	年代	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ
悲しみ	Ⅰ	―	*	*	**
	Ⅱ	*	―		
	Ⅲ	*		―	
	Ⅳ	**			―

	年代	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ
嫌悪	Ⅰ	―			
	Ⅱ		―		**
	Ⅲ			―	*
	Ⅳ		**	*	―

	年代	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ
驚き	Ⅰ	―	**		
	Ⅱ	**	―		
	Ⅲ			―	
	Ⅳ				―

	年代	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ
喜び	Ⅰ	―			
	Ⅱ		―	*	
	Ⅲ		*	―	*
	Ⅳ			*	―

	年代	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ
バイアス	Ⅰ	―			**
	Ⅱ		―		
	Ⅲ			―	
	Ⅳ	**			―

＊＊$p<.01$　＊$p<.05$

年代Ⅰ：1993-1995年度
年代Ⅱ：1996-2001年度
年代Ⅲ：2002-2007年度
年代Ⅳ：2008-2013年度

動プロフィールを図示したものである[2)]。1993～1995年では、「受容」、「驚き」が高く、「悲しみ」は低くかった。1996～2001年になると、「受容」、「驚き」が低下する一方で、「嫌悪」、「期待」の情動特性が高くなる。それが、2002～2007年には、「嫌悪」、「期待」、「恐れ」の情動が低下し、「受容」、「喜び」が増加に転じた。しかしながら、2008～2013年には、「受容」、「喜び」が低下を示し、「恐れ」、「悲しみ」の情動が高くなっている。また、「受容」が低いだけでなく、この年代では対極の「嫌悪」の得点も同時に低くなっている。

4　まとめ

1993年から2001年にかけて受容性の低下と行動抑制傾向の増加が生じており、このことへの対策として、調査校では保育者としての適性を入試の評価基準としている推薦入試における定員比率を引き上げた。また、保育者養成課程の教科以外に調査校独自の“プラスαプログラム”を取り入れる等の試みを行った。2002年から2007年にかけて見られる受容傾向の上昇と抑制傾向の低下は、こういった養成段階の介入に一定の効果があることを示すものかもしれない。

一方、2008～2013年には、それまでの年代とは異なる特徴がみられるようになった。すなわち、第1には「悲しみ」の得点が他の世代に比して高くなっていることである。喪失感、抑うつ感の高まりは、学生のみではなく昨今の日本社会共通の世相を反映しているともいえるかもしれない。

第2には「受容」が低いだけでなく、対極の「嫌悪」の得点も同時に低くなっていることである。本来であれば、「受容」と「嫌悪」は、他者や物を「受けいれる：拒否する」という相反する行動傾向を有する情動であり、他方が高ければ、もう一方が減少することが多いと考えられる。また、両方が高い場合には葛藤状態が生じていると考えられる。しかし、この年代は、分析対象となった他年代に比して、双方の得点が低くなっているのである。

他者や外界と接して、関わりを持っていく上で、遭遇した対象が自分にとっていかなる価値を持っているのかを評価するシステムと関連しているこの「受容：嫌悪」次元は、生物としての原初的な「生きる力」に密接に関連した情動の中心機能ともいうべきものである。その次元に特徴的な縮小が見られることは、留意すべきことであろう。この特性が、他の世代から「何を考えているのかわからない」等形容される特徴の所以と考えられるかもしれない。

この世代では、インターネット、携帯電話、スマートフォンの普及により日常的にEメールによるやりとりによって他者とのコミュニケーションをとることが中学、高校期には一般的になっていたと思われる。こういった文字のみに頼るコミュニケーションツールが我々に与える影響は未知数である。

この20年、日本社会はバブルの崩壊、リーマンショックといった庶民の生活に直接的な影響を有する経済状況の大きな変動、阪神淡路大震災、東日本

2）プロフィール上の情動配列は齊木（2013）の結果を参考にした。Plutchik（1980，2003）の配列に比して、「驚き」と「期待」の位置が入れ替わっている。

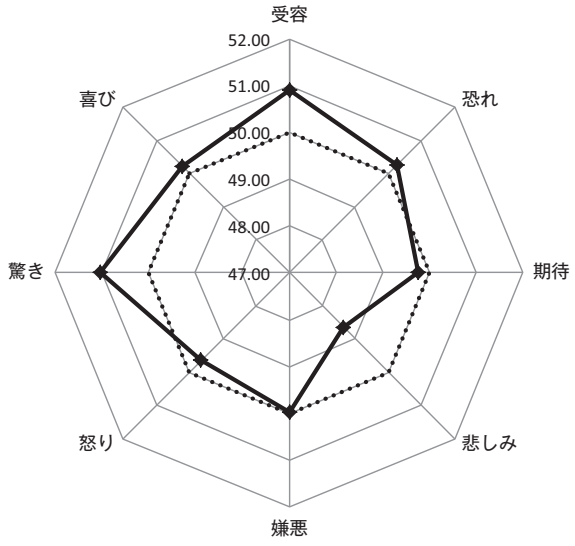

図3-1　1993～1995年の情動プロフィール

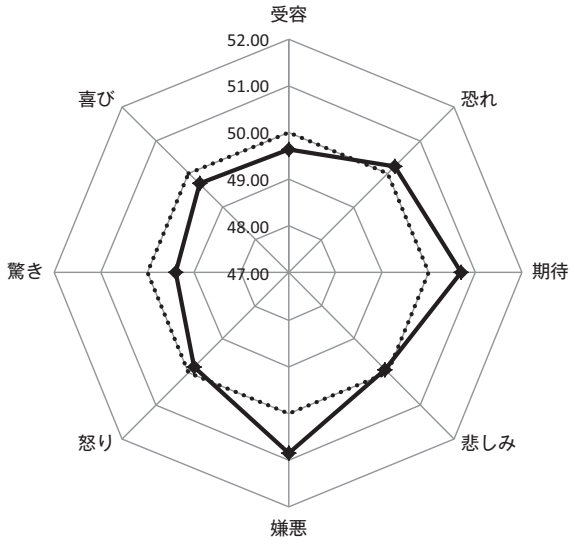

図3-2　1996～2001年の情動プロフィール

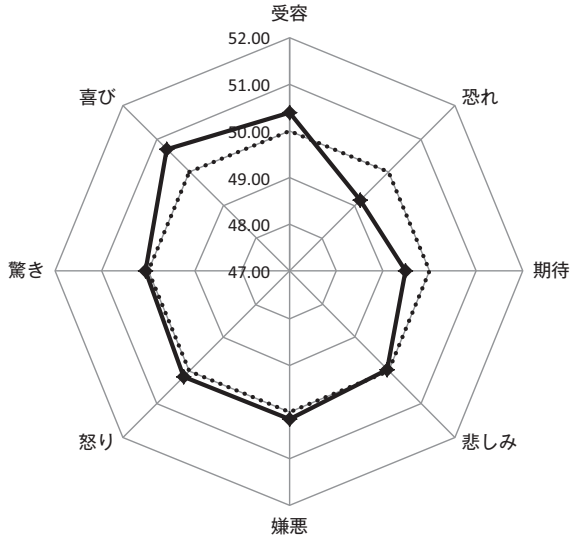

図3-3　2002～2007年の情動プロフィール

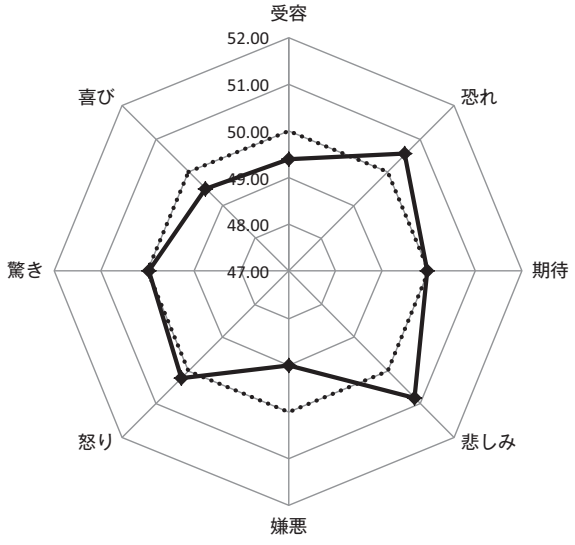

図3-4　2008～2013年の情動プロフィール

大震災という大規模な自然災害、人口減少に伴う社会構造の変化、さらに、情報環境の大きな変化を経験してきた。これらの社会環境の変化が、その時代に成長する子どもたちの情動特性に影響を及ぼしているように思われる。また、調査校においては2009年４月に法人合併がなされているが、このことが教育環境、方針に与えた影響等の本調査独自の要因を加味した分析、検討が必要と思われる。

しかしながら、20年に及ぶ本調査結果は、人間の特性の中でもより原初的で、生得性の強い情動特性にあっても、それぞれの個体が身をおく、社会や生活環境の影響を受け、変化する可能性が高いことを示唆するものであろう。

引用文献

Hama, H. & Plutchik, R. 1975 Personality profiles of Japanese college students: A normative study, *Japanese Psychological Research*, **17**, 141-146.
市川伸一 2002　学力低下論争　ちくま新書
苅谷剛彦 2002　教育改革の幻想　ちくま新書
松山義則・浜治世　1974　感情心理学　第１巻　感情と情動　誠信書房
三根（齊木）久代　1993　幼児用評定尺度における情動　聖和大学論集　第21号，139-146.
三根（齊木）久代　1998　幼児教育・保育系学生における感情特性―Emotions Profile Index を用いて―　聖和大学論集　第26号 A，97-102.
三根（齊木）久代　1999　幼児教育・保育系学生における感情特性（Ⅱ）―入学者選抜方法が与える影響：短期大学の場合―　聖和大学論集　第27号 A，85-90.
齊木久代　2013　保育者養成校における学生の情動特性

の変化―2001年から2010年までの10年間において―全国保育士養成協議会第52回研究大会研究発表論文集 268-269.
Plutchick, R. 1962 *The emotions: Facts, theories, and a new model.* New York: Random House
Plutchick, R. 1980 *Emotions: A Psychoevolutionary Synthesis.* New York: Random House.
Plutchik, R., & Kellerman,H. 1974 *Manual of the Emotions Profile Index.* Los Angeles: Western Psychological Services.
齋藤孝　2013　若者の取扱説明書：「ゆとり世代」は、実は伸びる　PHP 新書

要　約

本報告では、1993年度より2013年度までの21年間の保育者養成校入学者3,306名の情動的な特性についての調査結果を分析、検討した。この結果、1993年から2001年にかけて受容性の低下と行動抑制傾向の増加が生じたが、調査校における入試制度、教育課程の見直しとともに、2002年から2007年にかけて受容傾向は上昇に、抑制傾向は減少へと転じた。しかし、2008～2013年では、喪失感、抑うつ感が上昇している。また、他者や外界と接して、関わりを持っていく上で、遭遇した対象が自分にとっていかなる価値を持っているのかを評価する原初的システムと関連している「受容：嫌悪」次元において、他年代に比して、両極ともに低下がみられた。本調査結果は、原初的で、生得性の強い情動特性にあっても、社会や生活環境の影響を受け、変化することを示唆している。

キーワード：情動特性、保育者養成、ゆとり世代